

小池辰雄「キリスト告白録」序文

「キリスト告白録」第一巻「山上の大告白」はじめに

1999年8月発行

小池辰雄先生が1996年8月29日、天界へ旅立たれてから、今夏のご命日で満3年になる。

先生のご経歴——その足跡——については、先生の遺作である『霊界の星々——神の幕屋人物詩伝』（曠野の愛社、1998年8月29日発行）の中の先生自らの手になる自伝「天弓詩篇序歌」（11～15頁）「第一篇 生い立ち」（19～83頁）に詳細に叙述されている。

また先生がどのようにして、主キリストに導かれ、どのように主キリストを受けとつておられるか、聖書とどのように取り組んでこられたか、一言で言えば、先生の中に息づく主キリストの全貌は、先生の全十巻から成る『小池辰雄著作集』（小池辰雄著作刊行会、1975年～1988年刊）に結晶している。

そして、最晩年の先生のキリスト告白のエッセンスは、『エン・クリスト56号——小池辰雄召天記念号——』（曠野の愛社、1997年4月1日発行）の中に「最後の日曜講筵 汝、今日我と共にパラダイス——ローマ書第8章」としてまとめられている。これは、先生の日曜聖書講筵1996年6月9日「十字架と聖霊」、同6月23日「聖霊の愛」、同7月7日「神の選び」、同7月14日「まことのキリスト者」を要約的に復元したものである。

ちなみに小池先生は、しばしば恩師藤井武先生のご召天の日が7月14日だったと述懐されていたが、小池先生の最後の日曜聖書講筵の日がまた7月14日であったのも不思議なことである。小池先生は、その一か月半後に召天されたのであるが、92歳のご生涯の最後の最後まで、このように福音伝道に生き貫かれたのである。

小池先生の聖書講筵は聖書講義でもなければ、また、聖書から教訓を汲みとろうとする説教でもなかった。先生は、ヘブライ語聖書（旧約）、ギリシヤ語聖書（新約）に精通しておられたが、先生は常々、これらヘブライ語、ギリシヤ語のもう一つ奥の根源の響きに霊の耳を傾けよ、ヘブライ語でもギリシヤ語でもない、神の根源語の響きを受け取るようにと諭された。それには、己れを空しうし、主キリストの中に祈り入り、全身をキリストの中に投げ入れて、聖霊に、御霊のキリストに包まれ、貫かれて、聖霊の光の中で読まなければ聖書は読めない。

「私はお説教はしない。霊的生命たる、わがうちなるキリスト、みたまのキリストを告白するだけだ」



と語っておられた。だから先生の講筵には迫力があつた。聴き入る者は、いつしか、キリストの霊にとらえられ、満たされ、天的次元を味わわしめられた。天的よろこびに満たされていた。キリストが、

「活かすものは霊なり。……わが汝らに誇りし言は、霊なり生命なり」（ヨハネ

伝6章63節）

と言っておられるが、先生の言は、まさに霊言であり、「霊なり生命なり」であつた。

このような先生の聖書講筵を、できる限り生の形で、即ち、その語りかけの息づかいが伝わってくるような臨場感の溢れる形で、文字によって世に残したい、これが先生の集會に連なつた者の共通の願いとなつた。その準備は既に、先生のご存命中から東京キリスト召団において着々と行われていた。それがこのたび、東京キリスト召団新宿集會の会員の編集のもとに、先生の創設された「曠野の愛社」から刊行される運びとなつたことは、先生に名連なる者の一人として、よろこびにたえないところである。

小池先生が集會を始められたのは、1940年9月22日、先生のご長兄政美さんのご召天記念の日であつた。会場は、武蔵野吉祥寺のご自宅の一室。その後、先生はご自宅の一部を増改築して、多人数でも集會のできる集會場を作られた。こうして、実に56年の長きにわたつて先生は日曜聖書講筵を続けてこられた。その間、終始、この集會を支えてこられたのは、順子奥様であつた。先生のご健康のためにも、食生活の面で奥様は随分細やかな心くばりをなさつていた。

私が小池先生のお導きをいただくことになつたのは1959年の秋からであつた。私の勤めも住まいも京都であるため、日常的に先生に接するというわけではなかったが、折にふれ、上京しては先生の御宅にお邪魔したり、日曜聖書講筵に出席させていただいた。また、先生の聖書講筵の録音テープを恒常的に拝聴させていただいてきた。春、夏、秋の特別集會において、そして、武蔵野日曜集會での講筵テープを通して、先生の福音の神髄は、私の身体の中にしみ込んでいった。

先生の体得されたキリストの福音は、従来の伝統的なキリスト教のそれとは、随分異なっているように思われる。一言で言えば、ヨーロッパ的なキリスト教に対して、先生は、東洋の心をもつて日本人としての「道」を尊び、そこに花咲く無限無量なるキリストの福音を告白してやまれなかった。西洋の文化に精通しておられた先生が、西洋と東洋とを融合するような、両者を包摂するような豊かな秘めた福音を説かれた。それだけに伝統的なキリスト教の側からは受け入れ難い面も多分にあつたと推測される。むしろ既成の宗教に染まっていない人達によつて受け入れられるのではなからうかと思われる。そして、そのような垣根なき世界、隔てなき世界こそが、21世紀における心の世界でなければならぬ。



先生の聖書講筵は、1950年代の後半から、はじめはオープンリールの録音テープによって、後にはカセットテープの中に収録されてきたが、その総数は膨大な数にのぼる。これを主題ごとに、新約聖書と旧約聖書に分け、新約聖書マタイ伝福音書から順次ほぼ聖書の配列順に刊行される予定である。

その第一巻 マタイ伝福音書（二）は『山上の大告白』と銘打たれている。1987年から1995年までの12回の講筵が収められているが、これはほぼ先生の最晩年のものであり、そのうちの8回は、第5章1〜12節のいわゆる「山上の垂訓」の最初の部分の講筵である。先生は、山上の「垂訓」ではなく、キリストによる「山上の大告白」だと解しておられた。

「福音書のキリストの言は、全部、キリストご自身の内面の告白だ」

と。先生ご自身もまた、解説をしたり説教をしたりするのではなく、先生のうちなるキリストを告白することだ、と言っておられた。そして、この5章3節

「恵^{さいわい}福なるかな、霊の貧しき者。天国はその人のものなり。」

こそが先生の福音の原点なのであった。

このように講筵はすべて、先生の内面の告白であり、キリストへの祈りであるから、読む者もまた、祈り心で読んでいただきたい。内容的には、互いにかなり重複する部分があるが、一回一回の講筵が、先生にとっては日々新たなキリスト告白であり、内住の聖霊の中から語り出されている祈りの言葉であるから、どうか、その中へ投げ身する心根で、各人の日々の「祈りの友」として、本書を祈りの道しるべとしていただけるようにと心から願ってやまない。



小池辰雄「キリスト告白録」序文

「キリスト告白録」第二巻「霊の貧者」はしがき

2000年4月発行

このような形で小池辰雄先生の講筵録を刊行するにいたった経緯と先生の御生涯については本書の巻末に掲載の第一巻序文をお読みいただければさいわいです。

第一巻『山上の大告白』の続篇である本巻『霊の貧者』は、「13」～「23」の11回の講筵から成り、内容的にはマタイ伝の第4章から第6章にわたっている。最も古い講筵は、1955年の「15」霊の貧者であり、先生のキリスト告白の原型ともいうべきものである。この「15」霊の貧者で告白された福音の角度が、その後の40年間、先生を一貫して貫いている。第二巻の表題『霊の貧者』は、そのような見地から選ばれたものである。

最晩年の先生は、口ぐせのように、

「私はキリストの恵みに圧倒されて生きています。信仰などという言葉は使いたくない。こちら側の信仰などといった事態ではない。キリストの恵みの力が絶大でそれに圧倒されて生きているだけのこと。祈りは一言、「主さま！」とそれだけ。「主さま！」の一言でもう主さまの中に入ってしまう。キリストが私と一つになってくださる。「一如」、恵みによる一如だ。それがキリストの愛であり、恵みの現実だ。維でもそうなれる。」

と言っておられた。

今になって私自身、この先生の言葉にいたく感動している。

その通りだ。天の御座を棄てて地上に来てくださった主キリストは、ほんとうに私たち、ひとりびとりと一つになりたいと願っていらつしやるに違いない。

そうでなければ、十字架上に身を棄ててくださるはずがない。主の御愛は、私と一つとなるまで止み給わないのだ。手を合せて、「主さま！」と一言、心から祈れば、もうそれでよいのだ。小池先生はそのことを身をもって示してくださったのだ。これこそが万人に開かれた生命の道ではないか。

どうか、第一巻につづき、本書をも愛読し、日々の生活の糧とし、祈りの友としてくださる読者が一人でも多くありますように。

そして、ともに聖名を讃美することができますように、心からお祈りいたします。



小池辰雄「キリスト告白録」序文

「キリスト告白録」第三卷「聖意体現」はしがき

2000年8月発行

小池辰雄先生が天界に往かれて満4年目の8月29日に先生の「キリスト告白録」第三卷『聖意体現』が刊行されることとなりました。この第三卷の表題にもなった〔24〕「聖意体現（マタイ6・9～13）」は、じつは、先生の講筵の復元ではなく、先生の著作でありながら、先生の著作集全十巻には収録されることのなかった先生の名著『聖意体現——主の祈り——』（1959年、曠野の愛社）を復元したものであります。そこで原著について少し触れておきたいと思います。

『聖意体現——主の祈り——』は、もともと1954年2月ころ、聖燈社（大阪）から発行された小池辰雄著『聖霊の翼の蔭に』の中に収められていた「主の祈り」と題する先生の論説を改題して、1959年聖誕節に単行本として出版されたものであります。同書には付録として「霊の貧者」（「キリスト告白録」第二卷〔15〕）が収録されていました。

『聖意体現——主の祈り——』の表紙の上半分には両手を水平にひろげ、うつ伏せになつて文字通り「十」の字の姿で祈っておられるゲッセマネのキリストを描いたデュラーのデッサンが、淡い緑色で刷られており、その左下には横書きで「橄欖山の基督（1521年）」と小さな活字で記されています。この絵のすぐ下、中央部に緑色の活字で、「聖意体現——主の祈り——」と書名が印刷されています。

〔24〕「聖意体現は、旧著の付録「霊の貧者」を外してすべて元のままで復元したものでありますから、「序」は同書の序文にあたり、「まえがき」は同書の主論説である「聖意体現」のための「まえがき」であります。

旧著『聖意体現——主の祈り——』については、私には特別の思い出があります。1959年11月、小池辰雄先生が京都大学で開かれる独文学会にご出席のために京都に来られるとうかがった私は、それまで一面識もないにもかかわらず、先生に京大エマオ会主催でのご講演をお願いし、11月9日（月）の夜、京都大学楽友会館二階の大講演室において、「無の実存」なる演題のもとに、百二、三十名の聴識者を相手に、すばらしい講演をしていただきました。そのときの驚きと感激と喜びは40年後の今も鮮かに思い出すことができるほどです。こんなに自由で、高く深く豊かで幅広く重厚な福音把握があらうとは、まったく想像を絶するものでありました。数日後に先生からいただいたお便りには、

「楽友会館での『無の実存』は歴史的な意味をもつものと信じます。どうかエマオ会にとびこんでくる学生がふえますように。クリスマスには、12月20日、東京へ



来ませんか。」

とお誘いがありました。これに応えてその年のクリスマスに初めて先生のお宅へうかがったときに頂戴したのが、新刊の『聖意体现——主の祈り——』でありました。それ以来、同書は私の愛読書となり、赤線を引いたり書き込みをしたりしながら、幾度となく熟読いたしました。

どうか第一巻、第二巻につづき、第三巻をも、聖書の学びと祈りのためのよき手引きとして、一人でも多くの方が愛読してくださるようにと心から願うものであります。



小池辰雄「キリスト告白録」序文

「キリスト告白録」第四巻「狭き門」はしがき

2001年4月発行

私が1959年秋に初めて小池辰雄先生にお目にかかり、先生に師事してから、初めて参加した特別集会在が、1960年夏の伊香保での集会であった。その第一回集会の講筵が、本書冒頭の〔33〕「狭き門」である。

当時私は、先生がキリスト教界の中でどういう立場におられるのか、どういう道を行ってこられたのか、知識を有していなかった。そんな私が初めて参加した特別集会——今から40年前、当時の私は27歳の青年であった——が、先生の歩みの中の一つの大きな節目であったことを、このたび〔33〕「狭き門」を読んで知らされた。これは本書の中でも最も重要な講筵であると思う、以下に少しばかり述べさせていただくこととする。

先生はこの講筵の冒頭で、「神さまが追い詰めた場」ということを言っておられる。その背景は、先生の集会から数人の者が他の集会へ流れて行ったことであった。その人たちは、先生が信頼し、手塩にかけて育ててこられた人たちであった。先生の説かれる福音の道は派手ではない。宗教的な面での野心的なところがない。ただキリスト道をまっしぐらに進もうとしておられる。そこから外れて、見た目には華やかで、宗教的な野心にみち、何かをやりそうなグループ（大集団）の集会へと誘われて行った（本書34～35頁、「霊力的宗教か、道念的福音か」の項、参照）。そのことが先生にとって、まことに意外なこと、信じられないこと、と映ったに違いない。

「君たちは、私（小池）と志を同じうする同志ではなかったのか。キリストの心をほんとうに受け取っていたはずではなかったのか。何が君たちをそのように吸引したのか。何に魅せられたのか！」

と先生は煩悶されたことであろう。そうした状況の中でこの特別集会を迎え、いつものような周到な準備もなしえぬままに、無手勝流で、「無」の境地で臨まれたのがこの集会であった。そして第一回集会において、この講筵をされたのである。

それまでの先生の戦いは、いわば外なるもの——先生の真意を解せずして非難攻撃する人たち——に対する戦いだつた（先生が1950年秋に、火の如き聖霊のバプテスマを賜って一大変革を体験されて以来、それまでの親しき先輩、同輩たちから白眼視されることとなった）。以来、十年、今度は内部から別の道を往かんとする者が現れたのである。四面楚歌の戦いの中で、このことは先生にとってどれほど大きな衝撃であり、心の痛みであったかは、先生の立場に身を置いた者でないと分からないであろう。



先生は、この「狭き門」の講筵において、先生の根本的立場を鮮明に打ち出しておられる。それは、「自己義認」に対する徹底的な否定であり、「四つの非ず」の宣言である。

先生は、人間の罪の根源を「自己義認」においてとらえられた。あの罪（行為、思い）、この罪ではない。神の前に己れを義とすること、己れを立てること（そのような心の在り方、人間の本性）が罪であると。この自己義認が宗教的には、霊的傲慢や他人を審くパリサイ性となって現れる。先生は、「霊力的宗教か、道念的福音か」の項（34～35頁）および「霊的道念」の項（36～38頁）の中で、霊力的宗教は霊的傲慢に陥り、およそキリストの福音とは正反對のものであることを宣明しておられる。そしてご自分の往く道、めざすところは、「霊的傲慢、観念、御利益、パリサイ」の四つを排除したもの——「四つの非ず」——であることを宣言し、これはまことに「狭き門」「細き道」であるが、これこそ真理の大道である、と訴えておられる。

このようにして、自己義認に対する徹底的な否定こそが本書（第四巻）全体を貫くキーノートといえよう。それは、則、キリストの言、行に対する徹底的な降参、明け渡し、平伏しであり、転じては、「御意を成させ給え」との提身、すなわち、聖意体现、聖意身証への悲願となる。この祈りに先生は生き貫いた。自分の見ゆる相（現実）がいかに惨めであろうとも、真の自己、真の我は、十字架において無「罪」、無「私」を賜り、御霊による新生を賜った新しき霊止ひとなのである。このような確信と祈りに徹して先生は貫かれた。

先生のこの悲願霊願を受け取り、共感してくださる方は、本書を読みつつ自ずから祈り心となって、天界の先生の祈りに和して、祈りの日々を歩まれることであろう。



小池辰雄「キリスト告白録」序文

「キリスト告白録」第五巻「イエス眠り居給う」はじめに

2002年5月発行

第五巻の刊行にあたって、小池先生の生きておられた信の現実と言及してみたい。

先生において信とは、常に、「キリストの中に在る」（エン・クリスト）の現実に行き着くということ。その「キリスト」は、直接的には「みたまのキリスト」（霊なるキリスト）であるが、その背後には、十字架でもって贖罪して下さったキリスト、人間小池の過去・現在・未来のすべてを贖い切って下さったキリスト、誰が何と言おうとも、

「お前は私の十字架で完全に贖われてしまっている。私はお前を贖った。過去・現在・未来のお前、お前の全存在を贖ってしまった。お前は真つ白だよ」

と宣言してあり給うキリストが立つておられる。この十字架の主キリストの中へ祈り入る、全身を投げ入れる。そのとき、みたまの主と一つなることを体感する。「主さま！」と全存在を主の御ふところへ投げ入れる。これが私の祈りだ。祈りの世界で本当にキリストと一つになったら、今度はその中で何かお願いしたいことがあつたらお願いする。お願いする前にまずキリストと一つなる現実に入らなければだめだ。

全聖書の中心は何と言っても福音書だ。福音書は私の魂の故郷だ。福音書のキリストの言行に圧倒される。キリストは全く大変なひとだ。福音書を読みつつ、一つ一つの場面で瞑想し福音書のキリストの中に身を投ずる。それが祈りとなる。読むことが直ちに祈りとなる。そうすると全身に力を受ける。キリストの霊の力が流れ込んでくる。2000年という時間の隔たりも、あの福音書の舞台となつた場所と今いる日本という地との地理的隔たりも、みんなふつとんでしまつて、「主と一つ」という現実に入れられる。そのような読み方をしないと、福音書を読んだことにはならない。

福音書は生命を与える書だ。キリストは、

「我を食らい、我を飲め」

とおっしゃった。

「わが言は霊なり、生命なり」

とも。そのとおりだ。それを現実のものとして下さるのは、みたま（聖霊）だ。みたま（聖霊）は、キリストの霊であり、愛の霊だ。十字架を経たキリストは、このみたま（聖霊）を無条件で賜う。聖霊は愛の霊であり、われらに生命を与え、活かしてやまない愛の霊だ。

福音書のキリストは全く凄い。「イエス眠り居給う」その場面を瞑想してごらん。今にも沈みかかろうとするその舟の中で、イエスは舟板を枕に眠っている。これは父神の御ふと



ころに全托して眠っているのだ。眠りの中で全身に力が宿っている、潜んでいる。眠りの中で既に風を制し、波を制してしまっている。だから、弟子たちに呼び覚まされたとき、

「鎮まれ！」

と一言発せられると、風と波は鎮まり直ちに風となつた。我々の人生にも風波は絶えない。人生の嵐に見舞われたとき、人間的な判断ではもうどうにもならないと思えるとき、この「眠り居給うキリスト」の姿をじつと瞑想しよう。その中に身を投じよう。

「南無主さまー！」

と全身の叫びとともに主さまに全托しよう。我と主さまとは運命共同体だ。一蓮托生、主は我と一つになってくださる。すべてを荷なつてくださる。全托の信、主から賜る信に生きよう。

以上、私は、小池先生の心になって、先生の呼び掛けの気持ちを書き綴ってきた。先生の講筵はすべて先生の霊的現実の告白である。キリストへの感謝であり、讃美であり、祈りである。語りつつキリストの中へ身を投じておられる。だから、聴き手には同じことの繰り返しに映ることも、先生にとっては、絶対に繰り返しではなく、新たな体験である。新たな呼吸である。新たにキリストを食らいキリストを飲む実践である。

理性の世界での知識は、一度受容すればそれで十分だ。どこかに記録しておけば失われることはない。繰り返し聞かされると、うんざりする。しかし、生命の世界はそうではない。我々の心身は日々新たに新鮮な大気を呼吸し、食物を摂取して生きている。愛の世界も、日々言葉によって確認して新たなのである。霊の世界も同じことだ。我々の霊は神の言（霊言）によって生きる。福音書のキリストの全存在が霊言である。そんな気持ちで先生の講筵に霊聴していただきたい。そして見たまの主さまと一つなる恵みの中に生きていただきたい。



小池辰雄「キリスト告白録」序文

「キリスト告白録」第六卷「心安かれ」序文

2003年5月発行

主イエスは、

「二、三人わが名によりて集まる所には、我もその中に在るなり」(マタイ18・20)

と言われた。使徒パウロは、

「汝ら知らずや、汝らは神の宮にして、神の御霊なんじらの中に住み給うを」(コリント前書3・16)

と言った。

私たちが祈り心をもつて聖名^{みな}に在つて(聖名の中で)集う集いには主御自身が御臨在くださるということであり、私たちの集い、即ちエクレシヤ(聖名によつて召し出されたる者の群れ、教会)は、神の宮(神殿)であり、神の御霊、聖霊が宿つてくださるというのである。そして、私たち一人ひとりとは言えば、パウロは、

「あなたがたの体は、神からいただいた聖霊が宿つていてくださる神殿」(コリント第一6・19)

であると言う。即ち、私たち一人ひとりの体がまた「聖霊の宮(神殿)」だというのである。旧約では、人々は宮詣でに神殿に赴いた。神殿は聖なる場であり、神殿において神を拝した。罪ある汚れた身では神の前に出ることはできなかった。罪ゆるされたる身にして初めて神の前に出ることが許される。至極当然のことである。

新約の世界では、私たち一人ひとりが神の宮であり、聖霊の宿りたもう神殿であるという。私はこの事実(事態)に改めて驚いた。何という凄いことだろう。この生身の罪びとにすぎぬ私が(そして、あなたが)神殿であるとは! 外へ宮詣でに神殿へと出掛けるのではなく、わがうちに住まい給う神、聖霊を拝するのだ。このお方に祈ることができるようだ。どうしてもそんなことになったのか。ただ十字架の贖罪^{あがない}の故に。しかもそれは主の御旨^{みこころ}、御意であつたのだ。主イエスは私の中に宿ろうとしておられる。私を罪から、病いから、そして死からあがない切つて、罪無き義人、永遠の生命たらしめんとして、自ら十字架にかかり、罪を滅ぼし、死を滅ぼし、そして私の中に永遠に宿り住まわんとしていてくださる。そのために天の御座を棄てて地に降り、愛を顕し、遂には十字架の死をも受けてくださった。そして、墓を蹴破つて、まばゆい霊体となつて顕現し、天に昇り、今度は聖霊となつて弟子たちに降り、爾来^{じらい}、この救いの御業^{みわざ}を今に至るまで続行してあり給う。



小池先生は、

「十字架と聖霊とは絶対に切り離してはいけない」

と繰り返して語っておられる。また、聖霊、みたまは、何ものとも代えることのできない絶対の宝、唯一の宝だと告白しておられる。そして、

「十字架をほんとうに受けとれば、聖霊は来ざるを得ない」

とも。だから、

「祈りの中で深くキリストの中に入りなさい、キリストの中へと自分を投げ入れなさい」

と常々語ってくださった。この「十字架・聖霊」一如の恵みの事態は、私においては、十字架が私という存在、過去・現在・未来にわたる私の全存在を、全く無条件に完全にあがない切ってください、私を十字架において「無者」としてくださった、という事実（啓示の事実、霊的根源現実）に忽然と目覚めたとき、気付いたとき、その瞬間に、同時に、既に聖霊が来てくださったという、内住してくださったという恵みの事態として自覚された。これは全くもって神の業であり、キリストの御本願の為せるところであって、私の側に何の根拠もない、恵みそのものである。このことに気付いてから私は楽になった。いつでも、どんなときにも、「主さまー」と呼び奉ることができる。わがうちにいまし給う御霊の主さまに呼びかけ祈るのだから。そして、この御霊の主さまは、私の思いを知り給うて、自ら言い難き呻きをもて執り成してくださっている（ロマ書8・26）のである。

ヨハネ福音書では「助け主」とも「真理の御霊」とも呼ばれているこの「聖霊」は、私にとつては、みたまのキリスト、キリストのみたまであり、天界に在すキリストの分身としてわがうちに宿り給う。そして、私の生活のすべてにおいて私を導きたもう。私はこのお方に全托して歩む。見ゆるところでどうなろうと、そんなことは問題ではない。常に最善が成る。最善を成らしめ給う。願うことはただこの身を通して主の聖旨、御意の成らんことを。主の愛の生命が分かち与えられんことを。

小池先生は今、天界において主の僕として尊い働きをなさっている。そして、この『キリストの告白録』を糧として読者のお一人お一人が、真にみたまの戦士として、世に在つて強く雄々しく生き抜かんことを祈っていてくださると思う。



小池辰雄「キリスト告白録」序文

「キリスト告白録」第七巻「おさなごにならずば」序文

2004年12月発行

第六巻が昨年5月に刊行されてから既に一年以上が経過してしまった。本来ならば今年の春に第七巻が世に送られるはずであつたのに、このように遅延したのは、ひとえに、「序文」の執筆が滞つたためである。今年2004年が小池辰雄生誕百年に当たるので第七巻の「序文」では、小池辰雄先生の信仰の歩みを歴史的に跡づけ、先生の告白された福音の特色とその歴史的意識をも明らかにする内容の序文にしようと試みた。

折しも、先生の誕生日（2月7日）に合わせて、2004年2月8日（日）新宿スポーツセンター大会議室で開催された「小池辰雄生誕百年記念会」において、私は、「小池辰雄先生の使徒的信仰」と題する記念講筵をする機会を得た。その全文が、東京キリスト召団新宿集会の編集により、この8月に曠野の愛社から刊行された「エン・クリスト第57号」（小池辰雄生誕百年記念）に収録されるときにも、同号には先生の信仰史をも含めての簡潔・的確な年譜も掲げられている。それ故、重複を避ける意味からも、当初この「序文」で予定していた内容は、「エン・クリスト第57号」の上記講筵に譲ることをご了承いただきたい。そこで、本「序文」においては、本書の表題「おさなごにならずば」にちなんで、記してみたい。

マルコ伝第10章13〜16節に、

「イエスの触り給わんことを望みて、人々^{おさなご}幼児らを連れ来^{きた}りしに、弟子たち^{いまし}禁め^めたれば、イエス之を見、いきどおりて言いたもう『幼児らの我^{おの}に来るを許せ、止むな、神の国は斯^かくの如き者の国なり。まことに汝らに告ぐ、凡そ^{おの}幼児の如くに神の国を受くる者ならずば、之に入ること能わ^よず』かくて幼児を抱き、手をその上におきて祝し給えり。」

とある。

イエス・キリストが幼児を抱き、手をその上において祝福しておられる姿は、実に美しく微笑ましい。イエス御自身が幼児と同じ心、同じ姿になっておられるのだ。イエス御自身が幼児からどれほど大きな慰めを受け取られ、喜びを感じ取られたことであろうか。

小池先生もまた、いつまでも童心を持ち続けておられた。いわゆる大人ぶった世界は嫌いだった。幼児の飾らない単純さ、率直さ、何事に対しても常に全存在的に熱中する在り方を喜ばれた。

福音書の中で主イエス・キリストに出会い、その表情やお姿に接し、そして、祈りの中で、



また、祈り心での日常の中で、霊的人格キリストとの交流を重ねていくと、この世的な知恵、分別や利害打算の爽雜物が洗い落とされ、澄明な光の中でものごとを見る眼、その心―童心―を授かるように思われる。この心はまた、いつまでも存続するものは、信、望、愛であると言われていることに相通じるのではないだろうか。



小池辰雄「キリスト告白録」序文

「キリスト告白録」第八巻「七度の七十倍赦せ」序文

2005年12月発行

昨年のクリスマスに第七巻『おさなごにならずば』が世に送られてからちようど一年に。2005年のクリスマスに第八巻『七度の七十倍赦せ』が刊行されるにいたったことを心から感謝いたします。

第八巻に収録されている講筵は、〔73〕「幕屋の原相」（1989年）を除けば、比較的初期のものであり、1960年前後のもの、年齢的には先生の50代から60代のものであります。懇切丁寧な聖書解説の中に先生の激しい息遣い、迫力が伝わってまいります。

内容面から申しますと、〔73〕「幕屋の原相」は、

「一、三人わが名によりて集まる所には、我もその中に在るなり。」

のキリストの言にちなんで、なぜ先生が「教会」の在り方の原型を「幕屋」において捉えようとなさったか、その消息がよくわかります。キリスト直結の信、主の十字架の砕けと担いの愛に徹底的に赦され、担われ、抱かれである一人びとりが、キリストの御名の中に集うところ、そこに復活の主、聖霊の主が御臨在くださって導き給う、そういう聖霊の充滿する空間、それが新約の光でみた「幕屋」であり、集会の原相であるとして、「召団」と唱えられた次第です。

これをしつかりと受け取っていただきたいと思います。

〔74〕～〔77〕は、いずれもマタイ18・21～35で「七度の七十倍」のお話です。1959年、64年、67年、72年と4回、同じ箇所を取り上げておられます。〔75〕「主人と家来」は清里での第11回夏期特別集会、〔77〕「七度の七十倍」は西伊豆松崎での第19回夏期特別集会での講筵で、私はそのどちらにも参会したので、そのときの情景が浮かんでまいります。

松崎の集会は特に思い出深いものであり、私が京都で独立の集会を始めた年の夏期特別集会でもありました。翌年73年の松崎での夏期特集において、集会を「京都キリスト召団」と名乗らせてくださいと先生にお願いしたのを憶えています。

それはともかく、先生が「七度の七十倍」を4度も取り上げておられるということ、そしてその内容を拝読しますと、いかに先生がこれを大切にしてこられたか、言い換えれば、いかにこのことが難しいことであるか、生来の人間にとっては至難の業であること、同時に先生自身がキリストの御前にぶつつぶれ、平伏し、無条件の絶対の御赦し、過去・現在・未来の全存在を贖いきつてくださった主キリストに全托するほかなき我であることを自覚しておられた証であると思います。



〔78〕「一デナリ」（1958年）も大切な内容を含んでいます。「天国は……」という初めの出だしのところに注意せよ、と仰っていることにハッと気づかされました。それと、先生が、天国の次元とこの世の次元、あるいは、天国の法則・理法とこの世の法則・理法（自然法則）との違いをわきまえた上で、私たちは、天国人として「生命いのちの御霊みたまの法のり」で動きつつも、自然法則に従う人間として、心身を大切にし、反自然的な、無茶な身体からだの酷使は避けるべきこと、さらに、社会の一員として地道に、かつ喜びをもつてこの世での仕事、使命に打ち込んでいくことの大切さを説き、「ラボラーレ・エスト・オラーレ（労働は祈りである）」との言葉を引いておられることに注目したいと思います。

〔80〕「大饗宴」（1965年）も、清里での夏期特別集会での講筵で、先生の面目躍如たるものがあります。

「招かれる者は多いが、選ばれる者は少ない」

とのキリストの言がありますが、私は先生を通して「神・キリスト第一に」ということを徹底的に教えられ体に刻み込んできました。生命を懸けて愛してくださった、まさに十字架に生命を懸けてくださった主キリストに命を懸けてお仕えする、この身を献げていくのは人として当然の道であると思います。

感想めいたことばかり書きましたが、語り手の気持ち、その心で本書を愛読して下さるよう願ってやみません。



小池辰雄著『無者キリスト』の「復刊あとがき」

——2001年10月河出書房新社版——

2001年10月発行

このたび小池辰雄著『無者キリスト』が装いを新たに、出版されるに至ったことは、多年にわたって著者から身親しく教えを受けた者の一人として、心から喜び、感謝するところである。『無者キリスト』は、もともと「小池辰雄著作集」全十巻のうちの第一巻として、1975年秋、小池辰雄著作刊行会によって世に送られたものである。その年、著者は71歳、それまでに蓄積されてきた思索と研究と祈りの集大成として、この第一巻に全生命を注ぎ込む思いをこめて、執筆に携っていた。

「無者キリスト」というおそらく世界で誰も使ったことがない表現をもって著者が訴えたかった内実は何か。それについては、本書を熟読していただくならばおのずと明らかとなるであろう。また、本書にこめられた著者の祈りと本書の構成及び内容については、本書の冒頭の「総序」において簡潔的確に述べられているので、それをお読みいただきたい。

以下には、本書に流れている著者の聖書の理解、福音の把握、一言で言えば、著者の信仰と思想の特色について、述べてみたい。

著者小池辰雄は1904年2月7日、東京に生まれた。5歳の時に父を亡くし、母の手一つで五人の子女の末子として育てられた。やがて、父親代わりの長兄政美が、北京の地で客死する。1921年9月22日、26歳1か月という若きであった。遙かな中国の地から遺骨を抱いて帰る母は、過労と落胆のあまり黄海の船上で失明してしまう。兄の死と母の失明という相重なる悲痛な出来事に直面して、著者は人生のどん底を味わった。

長兄政美は、内村鑑三の高弟であった藤井武を師と仰ぎ、藤井武の厚い信頼と顧みを受けていた。信仰深かった兄に従って著者は、旧制高校時代に東京大手町での内村鑑三の聖書講義に列席し、次いで、兄の師である藤井武の集會に、目の見えない母の手を引いて、氏が召天するまでの5年間を皆勤する。

その10年後、1940年9月22日、兄の命日を期し、かつは外出ままならぬ失明の母を慰めるべく、武蔵野の自宅にて、独立の聖書集會を開くこととなった。著者の独立伝道の第一歩であった。

そして終戦を迎えて5年後の1950年、著者に一大転機が訪れた。同年11月、深い祈りの中で著者は、天界の主キリストから直接に聖霊のバプテスマにあずかった。使徒行伝第2章に記述されている、五旬節の朝の出来事にも比すべき、いまだ味わったことのなかつ



た霊的体験であった。

それ以来、著者の聖書の読み方が一変したという。新約聖書に記されているキリストの言、行、使徒行伝や使徒書簡に現われているところの「聖霊」の事態が、決して過去の出来事の記述にとどまるものではなく、今や、永遠の現在として、同質の迫力と息吹きをもって著者の全身に浸透するにいたった。

「聖書は頭理解でわかるものではない」、「聖書は身読すべき書」、「驚嘆驚倒して読むべき書なり」とは、著者が常に口にしていた言葉である。

「祈り」とは、自分をキリストの中に投げ入れることだ。十字架で、無私、無罪を賜っていることを全存在で受けとり、主の御前に平れ伏しの心をもって、絶対恩寵なる十字架の主様の中に祈り入る。そこで主様との一如の根源現実を賜る。十字架で無私、無罪を賜っている恩恵の場に、同時に聖霊が臨み給う、と説く。十字架の贖罪と、永遠の生命の実体である聖霊とは切り離すことのできない根源現実である。恵みとはキリストが恵みそのものだ。キリストは無条件にご自身を我々罪びとに与えようとなさっている。

「私はキリストに圧倒されて生きています。もはや信じてなんか生きていません。」

晩年の著者は、このように告白しつつ、神讃美、キリスト讃美の伝道の生涯を92歳まで貫いた。わずかに一週間病床に臥しただけで、1996年8月29日夕刻、著者は主キリストの御許へと旅立って往った。

こうした著者の信仰と思想の特色として、次の三つを挙げたいと思う。

第一は、著者の告白するキリストないしキリスト教は、西欧世界において変容を遂げたキリスト教ではなく、福音書において自在なすがたで顕現している霊的人格としてのキリストを、日本人の心をもつて歪みなく受容することによって著者の心魂の中に形成されたキリストである。著者にとってキリストとは、太陽の光のごとく、無色にして無限色の光を放ち、万人を救い上げ、永遠の生命を与えてやまない霊的人格である。著者の信ずるキリストは民族的な制約、限界を突き破り、一切を包摂し、一切を活かす愛そのものなるキリストである。

各民族には、それぞれ固有の宗教的伝統があり、独自の精神世界を形づくっている。それを西欧的キリスト教によって排除ないし否定するのではなく、それぞれの良さを活かしつつ、愛の光の中に包み込み、生命づけていく、そんな広さと深さをもったキリストの福音こそが真に世界に平和をもたらすものである、と著者は語りかけている。

西欧において形づくられたキリスト教になじみがたい日本人にとって、著者の告白するキリストは、そうした西欧的キリスト教の枠から解放された無限定、無量なるキリストである。著者は、キリスト教といわずして、「キリスト道」という。日本人は古来、道の民



であり、実生活の中で真理を身につけることを学んできた民だからである。

長年、ドイツ文学、ドイツ宗教史を専攻し、おのずと西欧の文学、思想、宗教に造詣の深かった著者は、他方で、仏教及び、中国・日本の古典に親しんできた。こうして著者の中で、東西が融合した。

著者の語るキリスト及びキリスト道は、ユニークでかつ、世界に通用する普遍性を帯びるものとなっている。本書第三部の第一章「無者Ⅱ無的実存者」や第二章「天鐘」、第五章「宗教と文化」をお読みいただくならば、そのことに気付かれることであろう。

第二の特色は、知的なものと霊的なもの、知性と霊性の双方が著者において全き調和を保っていることである。

従来、ややもすれば、理性と霊性、知的次元と霊的次元とは、相谷れないものとして、相互に排除し合ってきたように思われる。キリスト教界においても、知的・学的探求に傾斜するか、超越的世界を希求して霊的諸現象を追い求めるかのいずれかに偏する傾向にあった。

著者は、深い祈りと宗教体験を通して聖書及び神の絶対次元に深く分け入りつつ、それでいて、決して宗教的「諸現象」にふり回されるようなところがない。思索と信仰とが全き調和を保ち、まさに「健全な福音」という安心感を与えてくれる。

第三の特色は、「聖」と「俗」の共存である。

少数の聖職者だけが救いにあずかるのではない。「聖」なる方が「俗」なる世界に降りて来て、俗なる人間を、あるがまま、そのままに救い上げる。闇を光に化する、死せる者に生命を与える、日常性の中にこそ聖なるものが宿る。日常生活の中で我々は、神の絶対次元に触れ、救いにあずかり、生命づけられて生きてゆく。神・キリストは、ご自分の無限無量の愛をもつて、一切を荷い、一切を包み、一切を生かしめ給う。その愛に貫かれて我々俗人も、同質の愛をもつて隣人に接し、隣人を助ける存在とされていく。

このような生き方を著者は体現していた。

